〈共同研究〉称名寺聖教
『法事讃光明抄』について（二）
―所引の『阿弥陀経』註釈書から見る展望と巻二翻刻―

佐竹真城・赤松信映・西村慶哉・井上慶淳

要旨

『法事讃光明抄』四巻は、神奈川県称名寺所蔵（神奈川県立金沢文庫管理）になる国宝称名寺聖教のなかの一書であり、善導（六一三―六八一）撰『法事讃』二巻を註釈したものである。本書の撰者は、法然（一一三三―一二一二）の門下の一人である覚明房長西（一一八四―一二六六）であり、本書が彼の思想を窺うことができる貴重な一書であるということは、すでに『宗学院論集』九一号（二〇一九年）に巻一の翻刻とともに概要を記して報告した。小論はその続編にあたるもので、特に『法事讃』巻下において全文引用される『阿弥陀経』本文を解釈する上で、長西が引用する諸師の『阿弥陀経』註釈書から見えてくる展望を纏め、あわせて巻二の翻刻を紹介することで、今後の研究の進展を願うものである。

はじめに

小論は、「〈共同研究〉称名寺聖教『法事讃光明抄』について（一）―概要と巻一翻刻―」と題して発表した論攷[1]の続編であり、称名寺聖教『法事讃光明抄』巻二の翻刻を掲載するものである。したがって、概要ならびに巻一の翻刻は前稿を参照願いたい。

また、巻二の翻刻を紹介するにあたって、本書所引の『阿弥陀経』註釈書から見る展望について言及しておきたい。

『法事讃疑芥[2]』所引の『阿弥陀経』註釈書から見る展望（佐竹）

『法事讃疑芥』は、巻二から巻四にかけて、『法事讃』巻下を註釈している。『法事讃』巻下といえば、『阿弥陀経』（以下、『小経』と略称）を全文引用していることが知られ、当然ながら『法事讃疑芥』巻二から巻四には『小経』の註釈が施される。したがって、撰者である長西の『小経』理解を窺うことができるという点で、大きな価値を有している。

さて、本書における『小経』註釈の特徴の一つとして、諸師の『小経』註釈書を多分に引用しながら註釈する点が挙げられる。引用される諸師の『小経』註釈書と引用回数は、左表の如くである。

■（表）『法事讃疑芥』所引『小経』註釈書と引用回数

撰者	典籍名	引用総数	（巻二）	（巻三）	（巻四）
僧肇	『阿弥陀経疏』	**47**	28	11	8
天台	『阿弥陀経義記』	**17**	7	7	3
慧浄	『阿弥陀経義述』	**1**	0	1	0
仁岳	『阿弥陀経新記』	**6**	1	4	1
慈蔵	『阿弥陀経記』	**5**	3	1	1
慈恩	『阿弥陀経疏』	**29**	11	13	5
慈恩	『阿弥陀経通賛疏』	**14**	4	6	4
慈恩	『阿弥陀経述讃』	**4**	1	2	1
靖邁	『称讃浄土経疏』	**1**	1	0	0
玄一	『阿弥陀経疏』	**29**	15	10	4
円測	『阿弥陀経疏』	**30**	19	7	4

円測	『阿弥陀経疏』	**30**	19	4
元暁	『阿弥陀経疏』	**12**	5	3
智円	『阿弥陀経疏』	**39**	16	7
智円	『阿弥陀経西資鈔』	**5**	2	1
元照	『阿弥陀経義疏』	**38**	14	11
戒度	『阿弥陀経疏聞持記』	**4**	0	2
用欽	『阿弥陀経超玄記』	**5**	1	1
希深	『阿弥陀経疏』	**3**	0	0
源信	『阿弥陀経略記』	**24**	0	13
永観	『阿弥陀経要記』	**29**	10	11

※本表の撰者については、基本的に『仏書解説大辞典』に依拠しているが、諸史料に基づいて誤りを指摘できる場合、今日伝えられている撰者を示した。

『小経』の異訳である求那跋陀羅訳『小阿弥陀経』・玄奘訳『称讃浄土経』の註釈書も含めると、一七師・二〇書から、実に三四二回もの引用が確認できる。また、なかには引用後に「●●同之」（●●＝人師名）などのように、同義である場合に引用を省略するケースもあることから、実際はより多くの引用数となったかもしれないことが想像できる。そして、これらの引用典籍のなかでも、殊に㈠今日には散逸して伝わらない典籍の引用が確認できる点、㈡僧肇撰と伝えられる『阿弥陀経疏』（以下、『僧肇疏』と略称）が最も多く引用されている点、そして㈢宋代典籍を多く受用しているという三点は注目に値する。今回は、この三点のうち、特に㈠㈡について整理しておきたい。

㈠所引の『小経』註釈書における散逸文献について

『法事讃疑芥』に引用される『小経』註釈書については、前掲の表に纏めた如くであるが、なかでも表において網掛け表記した典籍は、今日には散逸して伝わらない逸書である。殊に、慈蔵や仁岳・希深など、中世の浄土教諸師も殆ど引用していない人師の典籍が見られることから、『法事讃疑芥』の撰者である長西が、広い視野をもって研鑽していた事実を窺うことができ、『浄土依憑経論章疏目録』（以下、『長西録』と略称）を纏め上げたことも納得できる。実際、『長西録』には、それらの逸書が記載されているのである。[*3]

そして、これらの逸書のなかでも、玄一撰『阿弥陀経疏』・円測撰『阿弥陀経疏』（以下、『円測疏』と略称）・永観撰『阿弥陀経要記』（以下、『要記』と略称）については、相当回数の引用を確認できる上、今日まで知られていなかった文言も散見されることから、逸文研究へと展開させられる可能性がある。とりわけ『円測疏』は、『長西録』には「円測西明寺。法相宗。本経求那跋陀羅之訳」（『仏全』巻一、三四三頁下）とあり、『法事讃疑芥』にも「アミタ経疏云経本崔那拔多羅翻沙門円測造」[*4]（巻二・五丁右）とあることから、今日に伝存していない求那跋陀羅訳『小阿弥陀経』を註釈したものであることが知られるので、その註文はもちろん所釈の経典という観点からも貴重である。

また、『要記』については、筆者はすでに『法事讃疑芥』をはじめとして、他の古写本および刊本等から逸文を蒐集して発表したことがある。[*5]そしてその逸文から、これまで知られていなかった思想を窺うことができ、永観研究に新見地を提供することができた。この点に鑑みれば、『法事讃疑芥』だけで完遂することは難しいものの、『法事讃疑芥』を端緒として、たとえば同じ称名寺聖教のなかの空寂撰『法事讃要略記』二巻や、[*6]道教撰『法事讃見聞集』（推定）甲・乙[*7]をはじめとし

た、他の古写本や刊本等から逸文を蒐集して研究を行うことで、浄土教研究に新たな視座を設けられる可能性があると考える。

如上、『法事讃疑芥』所引の『小経』註釈書は、浄土教研究に重要な意味を持つものと考えられる。これらの逸文研究は今後の課題である。

㈡『僧肇疏』について

僧肇（三七四または三八四―四一四）は、鳩摩羅什の門下として知られ、『肇論』などの著作を残している人物であるが、『僧肇疏』については、『長西録』を初見とする。『僧肇疏』については、たとえば良忠撰『法事讃私記』に「肇云」として引用されることが知られるが、その内容は、慈恩『阿弥陀経疏』（以下、『慈恩疏』と略称）とほぼ同一であるなど、種々の問題を孕んでいる。そして、『慈恩疏』も、今日では非慈恩撰述書と考えられており、その問題はより複雑化している。こうした『僧肇疏』と『慈恩疏』の関係について、小沢勇慈氏は、『法事讃私記』に引用される『僧肇疏』と『慈恩疏』を比較研究し、両書の説示は概ね一致するが、別時意の説示に大きな相異のあることを指摘している。[*8]

『僧肇疏』は長らく散逸していたが、愛知県真福寺大須文庫に伝わる『漢書食貨志第四』の紙背に、三七〇行にわたって書写されているものに、「僧肇」との撰号を有していることが指摘されている。[*9]それを承けて、近年では曺勢仁氏が、真福寺蔵本の『僧肇疏』を用いて、小沢氏の『慈恩疏』ならびに『法事讃私記』と比較した研究を深化させ、『法事讃私記』に引用される『僧肇疏』と真福寺蔵本『僧肇疏』との説示がほぼ一致することを指摘している。[*10]

これらの研究を踏まえた上で、『法事讃疑芥』における『僧肇疏』と『慈恩疏』の引用に注目すると、次のような特徴を看取できる。

肇云、問此経部類多少……其余二経如前已釈可知文。慈恩与之全同也。（巻二・一丁右―左）[*11]

肇云、今別十六人、其中阿難雖非羅漢、以徳望深重故。亦衆所知識在此会文。慈恩同之（巻二・一一丁右）

肇、薄俱羅此云善容……真実少欲一銭亦不受文。慈恩釈全同也。（巻二・二〇丁右―左）

肇云、智度論云、釈為能提為天桓因為主……上来引証分、亦云証信序文。恩釈全同（巻二・二三丁右）

恩云、智度論問云、浄土中諸仏有无量神力……亦令无情樹木而演説法聞則□受文。肇与観同之。（巻三・一四丁左―一五丁右）

すなわち、『僧肇疏』を引用するにあたって『慈恩疏』も同文であれば、『僧肇疏』の引文の後に本文乃至註記にて『慈恩疏』も同文である旨が記されるのである（『慈恩疏』を引用して『僧肇疏』も同文である旨を記す場合もある）。このことからも、『僧肇疏』と『慈恩疏』が同一の文を相当数有していたことが知られる。一方で、

肇、法花経云、此名黒曜。増一阿含云、迦留陀夷其身極黒、夜行乞食時天大闇而至他屋、有聞電光。彼家婦人懐孕、電光中見謂之黒鬼、怖而堕胎。乃謂之曰、汝何鬼耶。答。我瞿曇弟子、今来乞食。彼女悪罵。如来知時、即敕比丘不遇中食、亦不得預乞食文。……恩云、正法花云、此名黒曜。毘奈耶律云、名黒光文。（巻二・一九丁左）

肇云、計雨花意為厳、意為厳飾。其花覆地厚四寸。随色次□分布而不雑乱、光沢香耎。足蹈上行裁、下四寸挙足還起。曼陀羅者、此云花言如意花。曼殊沙名柔耎文。……恩云、曼陀羅者、此云赤円花、亦言如意花。正法花名適意花大適意花。若曼殊沙名為柔耎花。即大品経中、帝釈両曼陀羅花供養般若波羅蜜。須菩提言、此

花従心樹生。即如心所欲而雨也。又釈者、花所生従其心生。然花貌終是赤円文。
（巻三・一〇丁左―一一丁右）

肇云、正法念経云、四天已上无実畜生。諸天福力為厳処所、亦有禽獣。然非実報。何況浄□而得有之。言諸鳥者、ミタ所化作文。恩云、言諸鳥者、或ミタ所化、或宝光状似之文。……恩云、人疑云、此鳥既非実報、当是何身。答曰、是彼仏化作、或宝光明化作意、欲令其助宣正法故文。
（巻三・一二丁左）

肇云、謂我法眼見是勝利、勧汝勤修往生也。慈恩云、我了々見々有如是勝利故、勧汝往生也文。
（巻三・二三丁左）

等の用例の如く、『僧肇疏』を引用した同じ文脈のなかで、『慈恩疏』を重ねて引用する場合もある。その場合、引用する文言は相異していることが窺える。

如上の事実から、長西は『僧肇疏』と『慈恩疏』を類似する文言は多いものの、『長西録』で扱っている如く別書と見なしていることがわかり、多くの場合は『僧肇疏』を優先する態度を見せている。また、『僧肇疏』は、

肇公義疏云、善男子者、所護念人アミタ仏及六方恒沙諸仏、是能護念人也。通賛同之文。
（巻四・一〇丁左）

とある如く、慈恩『通賛疏』とも同文を有していることが見て取れる。これらの点に鑑みて、『僧肇疏』と『慈恩疏』・『通賛疏』は密接な関係にあることがわかり、慈恩仮託の偽撰書であることが定説となっている両書の成立を考える上でも、『僧肇疏』は重要であるといえる。そして、『法事讃疑芥』に見られる『僧肇疏』の引用文は『法事讃私記』を超える分量を誇る点から、真福寺蔵本が公開されていない現状においては一級資料となり得る。また、今後真福寺蔵本の研究が進んでいくにしても、正確性を窺う上で貴重な対照材料となることは間違いないだろう。

まとめ

『法事讃疑芥』における『小経』註釈では、当時としては最新ともいえる、宋代人師を含めた諸師の『小経』註釈書を多分に引用しながら註釈するという特徴がある。そのなか、小論では散逸文献と『僧肇疏』に注目し、今後の研究展望を述べてきた。遺憾ながら、展望を提示するのみで実際に検討を行うところまで至っていないが、『法事讃疑芥』が今後の浄土教研究にあらゆる可能性をもたらすであろうことに、疑いを挟む余地はないだろう。今後、本書を通して浄土教研究が益々進展することを期待している。

付記

小論は、公益財団法人 三菱財団の第四八回（二〇一九年度）人文科学研究助成ならびに本願寺派教学助成財団の平成三〇年度助成による成果の一部である。また、小論の執筆にあたり、金沢文庫御当局には格別の御高配を賜りました。衷心より感謝申し上げます。そして、本願寺派史料研究所研究員の岡村喜史先生には、翻刻にあたって貴重な御助言を賜りました。重ねて御礼申し上げます。

キーワード　覚明房長西　浄土疑芥　阿弥陀経註釈　僧肇　金沢文庫

『法事讃疑芥』巻二翻刻

（佐竹・赤松・西村・井上）

【凡例】

①本翻刻は、称名寺聖教『法事讃光明抄』の巻二（94函4―2）を翻刻したものである。

②漢字は新字の通行体に統一し、略字（合字）は正字に戻して翻刻した。

③各丁数は〈　〉で括って示し、行取りは原本に準じて行頭に行数を記した。

④訓点・合符は原本に付されている通り翻刻したが、スペースに関しては必ずしも原本にはよらず、原則として見出しの前後および問の直前、科段等に適宜私的に付した。ただし、何れの場合も行頭には付さなかった。

⑤補記や訂記は本文に反映して翻刻した。

⑥翻刻に使用した各種記号が示す意味は次の通りである。

・「□」→湮滅

・「……」→本文に付された省略符合箇所

⑦引用文については、管見の範囲で確認し得た出典を（　）内に割書で示した。

⑧写誤や脱字など、意味が通らない箇所が散見されるが、本翻刻では史料性に重点を置き、明らかな誤りと判断できた場合でも校訂はしなかった。

⑨特に必要な情報を示す場合、脚註に記した。

【本文】[*12]

〈一丁右〉

01安楽行道転経願生浄土法事讃巻下等事

02疑云上巻无安楽之二字与今不同如何答无別由_有道理_随宜也　又安楽者

03何義歟答口云西方安楽行故標所帰_安楽也而下巻正誦経故也　又上巻云

04転経行道与今相違如何答无別由_只有道理_不違義_随宜也

05仏説アミタ経等事　尋云今有何由_不挙経題_歟答今非依文_釈義_只是玄

06義欲讃大綱許也故不挙題_歟　三経説時前後事　尋云三部浄教説時前

07後如何答肇云問此経部類多少宗趣所明答窮括部類有其四本通

08明浄土即以浄土為宗一観経二无量寿経三小アミタ経四鼓音経……上来

09即以四経宗趣及部類多少然四経前後者道理先為説令知次教修生

10業_次断疑証実即无量寿経為初観経第二小アミタ経第三鼓音経第

11四然以事_推験即観経為初无量寿経為二何以知之_准説観経_時闍

12王猶為太子_創奪父位_母時見害因請如来為現西方_教修定散二善_

〈一丁左〉

01説无量寿経時闍王以登位_太子作儲君_故大アミタ経等云如来説西方事

02時阿闍世王太子与五百長者子_持蓋献仏聞アミタ廿四願_如彼仏記_却後

03皆得如二アミタ仏以此知居第二人云何阿闍世王太子即闍世身爾時猶未

04登位故為太子_来至仏所_今釈不然若爾応除王字_但言阿闍世太子既

05標王及太子_明知即父子名殊是故无量寿経当第二_観経自為夫人无

06量寿経自為人天大衆問若観経是初為夫人説者何故下経仏還霊
07山合阿難重演而衆无所請明知太衆以曾聞故由以聞故更欲令聞修
08生彼業所以如来勅令重演定散二善何得即以観経為初答如来意令大
09衆知定散二善三世諸仏説為浄業故令重説又冀此経永伝末代後若
10結集知阿難所伝不虚所也令説非為已聞後不請而説即当第二也其
11余二経如前已釈可知文慈恩与之全同也一云自下第二顕経時処者先弁
12説経前後二明反訳初弁前後者有二説一云先説観経次説両巻後

〈二丁右〉

01説此経何ヲ以知者大アミタ云如来説西方事阿闍世王太子与五百長者
02子持蓋献仏聞説アミタ廿四願等一故知述経二云亦同於此故知闍世登位
03方説両巻二云先説両巻次説観経後説アミタ経以観経云為説卅八願故顕
04有二説今後為好然阿闍世王者即由二義一頻沙羅王移於寒林付政太
05子故二閉父王得自在故然説両巻時闍世不聞闍世之子独往聴説然下
06後釈太子刷護経云阿闍世王太子名為刷護長チャウ者子五百人各持黄金
07花蓋余同上　尋云法照五会法事讃小経先開説見ニ歟謂（巻本、『大正蔵』巻四七・四七四頁下、四八五頁下）浄
　土五会念仏略
08法事讃一巻南岳沙門法照於上都章敬寺浄土院述并序アミタ経讃文
09釈迦調御大慈尊救世先開浄土門欲説荘厳極楽国其時正在給孤園……
10又（『五会法事讃』巻本、『正蔵』巻四七・四八七頁中）云新アミタ経讃十六偈釈迦悲智広无辺先開浄教利人
　天并時声聞无量
11衆其時聴在給孤園文若爾者今師意小経ハ先致仏釈歟如何答有二云其義
12爾也有云此約舎衛国一云先開等一歟　尋云今経翻訳之時代如何答有云
　此経有三

〈二丁左〉

01代訳二一アミタ経亦云无量寿経廬山集云小无量寿経如来滅後一千三百五十年晋ノ安帝世ニ来
02天竺亀茲国ノ三蔵法師鳩摩羅什婆秦ニハ云童寿一弘始四年辛丑一月八日第一出ス
03具在別録一小无量寿経或无小字一云アミタ経ニハ如来滅後一千三百八十余年宋ノ文帝世ニ中
04天竺ノ沙門求那跋羅宋　言功徳賢孝建年第二出具在別録三称讃浄土仏摂
05受経一巻如来滅後一千五百九十九年大唐高宋世ニ沙門釈ノ玄奘永徽クキ
06元年庚戌正月一日於大慈恩寺ノ翻経院一第三出具在別録今経慈恩通賛疏
07第一（巻上、『大正蔵』巻三七・三〇頁上）云翻訳時人者此経前後有其四訳一一秦弘始四年二
　月八日羅什訳一名小无
08量寿経一二字元嘉年中求那跋陀羅訳一四紙三求徽クキ六年大唐三蔵於慈
09恩寺一訳称讃浄土仏摂受経一十紙四後秦又訳出アミタ経偈頌一一紙而失
　訳
10主一今所解者即是秦羅什法師所訳文仁岳新疏上云此経凡有四訳……雖
　四本一
11梵吏言歟乃同今検第二訳未見其本若偈頌者与此全別不応指同梵吏文
12尋云小経等三部渡我朝一見何時代一歟答

〈三丁右〉

01尋云見経文一名称讃不可思議功徳一切諸仏所護念経一随同本異訳名称
　讃不
02可思議仏土功徳一切諸仏摂受法門一与今一文異義同也而今題スル アミタ
　経一誰人所為歟
03答元照義疏（『小経義疏』巻上、『大正蔵』巻三七・三五七頁中）云此経本名称讃不可思議功徳一切諸仏所
　護念経一……奘師唐
04訳即用本題一云称讃浄土仏摂受経一語雖少異一義意大同シ対之一可見一今経
　秦訳
05隠略シテ本題一……拠宗一取要一別シテ建ツクル此題一略有五意一一則上符カナヘリ経
　分一中唯示持名方
06法一故取仏名一用標題首一二則下適カナフ機宜キ一ミタ仏号ハ衆所楽カフ聞一故用標
　題一必名ク

07信受故三理自包含但標　仏名一称讃護念任運自摂故四義存便易一梵号

08兼含耳聞淳熟　故五語従　簡要一後世受持称道不繁　故且如唐訳一

09従本一立題一而未聞流布一文故知訳者所為也　尋云見経文相一称讃不可思議功徳

10者只是称美之言一也正経得名一切諸仏所護念経也以何得知一即経下文云云一何々故

11名為一切諸仏所護念経一爾者如何答一往爾也但今所引文為次下云一切諸仏

12諸共所護念随終一出護念之言許一也異訳題目与今一府合　又元照義疏（『大正蔵』巻三七・三五七頁中）云

〈三丁左〉

01此経本名称讃不可思議功徳一切諸仏所護念経一総十六字経字為通題一

02可知永観アミタ経要記云弁題目者梵云仏陀槃遮アミタ修多羅此云

03覚説無量寿経一今梵漢並存故云仏説アミタ経一文　姚秦三蔵法師鳩摩羅

04什奉詔訳　等事　尋云姚秦并鳩摩羅什名義如何答ミタ経疏西資

05鈔智円云初標両訳秦羅什者秦凡有四謂亡秦前秦後秦乞伏秦今言

06秦者即後秦姚代也楚語鳩摩羅什婆此云童寿亀茲音丘国人以

07秦弘始三年方入長安一秦主勅僧碧等八百沙門一次受什旨秦主於

08草堂寺共三千僧手執旧経而秦定之凡訳経九十八部合四百廿一巻

09僧叡僧肇道常等筆受文元照（『小経義疏』巻三七・『大正』三五七頁中）云咸通伝説羅什法師七仏以来翻経

10信非虚矣一文仏説アミタ義疏超玄記一云用欽姚秦即東晋時偽国号秦

11姓姚以筒大簡符秦乞伏故梵語具云鳩摩羅什此云童寿一亀茲音丘

12国人以秦弘始三年入長安秦主勅僧碧等八百沙門資受什訓前後

〈四丁右〉

01凡訳経九十八部僧叡肇道恒等筆受今世盛行文西資抄云訳者謂

02翻訳之人也訳易也謂変一易　梵語一以成花言一周礼掌　四方之語各有

03其官一比北歟方曰訳一但漢世多以北狄一交通訳人兼善一西語一是時仏法西来

04遂使訳人翻之因是一仏経感称訳也文　尋云付玄義分以大意釈名諸師解

05釈如何答今師意雖一云入文一只是玄義分也即当大意也只是賛大綱一故

06拠諸解釈一者アミタ経義疏巻一云釈僧肇法師撰窃聞三宝之宝理

07超繫象之表三乗之乗事渉名言之迹原夫真際之理平等性空

08赴機啓権実之門接凡施浄穢之土識其路者即悟黙一途迷其趣

09者則理事大隔今言仏説アミタ経者道危城之要躅群苦海之舟航

10仏者名覚而諸衆生長寝生死不能覚悟一唯仏能覚既自覚以復能覚

11他故名為仏説者開示解釈故名為説アミタ者含其二義名アミタ一无量光

12明故名アミタ二无量寿命故名アミタ経者訓レ法訓常故言経也文

〈四丁左〉

01アミタ経疏京兆慈恩寺基法師撰大体同之アミタ経義記巻一（『大正蔵』巻三七・三〇六頁上）云天台山智者

02大師撰夫至聖垂慈照機一応迹開導六道一普二済十方一逐二境昇沈一随

03縁浄穢一斯則善根摂誘一引趣菩提一是故大覚ミタ昔弘誓力応二形極

04楽一現処二道場一三輩願生一皆入二定聚一色像殊勝一寿量難思一宝樹天花

05咸能演法清風流水俱説二妙音一聞唱一苦空一証二无生忍一釈迦聖至本願

06弘深一不捨二慈悲一化茲穢境五痛焼燃八苦煎逼一広明誡勧一遍洽二群

07品一示二其妙術一十念往生四衆奉行一依教修観説有広略一時処不同一霊鷲

08宣二揚三種浄業一舎衛一敷六方護念アミタ者天竺梵音振旦訳言為无量

09寿化主極号ニハ以立嘉名一経者訓常由聖心口一此即釈尊所説語西方事一故
10言経也即斯一教在文雖レ約明義一寔繁シ総語西方安養国界文
11アミタ経記（『大正蔵』巻三七・二四八頁上）云釈元暁撰将説是経三門分別初述大意次題経
宗其第三
12者入文解釈第一大意者……牟尼善逝現此穢土誡五悪而勧往ミタ如来
〈五丁右〉
01御彼浄国引三輩而導生今是経者斯乃両尊出世之大意四輩入道之
02要門示浄土之可願讃妙徳之可帰妙徳可帰者耳聞経名則入一乗而无退
03口誦仏号則出三界而不還而況礼拝讃詠専念観察者哉浄土可願者
04浴於金沙蓮池則雖有生之染因遊玉樹檀林則向无死之聖果加復見
05仏光入无相聞梵響悟无生然後乃従第五門出廻□ム轡生死之苑鵄上七市反鴞
06涅槃之林不従一歩普遊十方世界不舒一念遍現无辺三世其為也可勝
07度乎極楽之称豈虚也哉言仏説者従金口之所生千代不刊之教アミタ
08者含宝徳之所立万劫无尽之名能所挙以標題目故言仏説アミタ経文
09アミタ経疏云経本崔那抜多羅翻沙門円測造西明寺開発此経四門分別一釈題目二明宗
10体三摂教所在四判文解釈言題目者窃以真性一味妙絶有无之境法
11相万途乃成言談之路所以遍帰法身非名言之所及種意応化有浄穢
12之咸起是故釈迦能仁居娑婆以化物勝覚弥陀住妙刹以摂引可謂
〈五丁左〉
01諸風請息天鼓自鳴衆水澄清月影頓現仏説アミタ経者自他覚帰能生
02物解故名仏説若旦梵音名アミタ素怛攬此云翻訳アミタ者名无量
03寿命及以従衆三種无量然勝立号名无量寿素怛攬者此翻為経々
04有二義貫穿摂対貫穿所応説義摂持所化生故々言仏説无量
05寿経此則第一釈経題目訖文アミタ経記本云玄一法師解釈此経四門分
06別初述大意釈経題目第二顕経時処第三明経宗体第四依文正釈初述
07大意釈題目者夫至理凝舜言像靡測其源正覚希夷空有未窮甚
08致是以如来揚恵日於重寘沇慈舟於苦海无深而不焉莫帰趣而不度
09遂以示極楽於西方而開浄刹之因勧修善於東域令雖穢土之痛可
10謂殖善因之春露滅悪業之秋霜今此経者斯乃雖穢国之妙津進浄土
11之直路故能誦持尊名永除億劫之罪暫聞経法則樹安楽之因名極楽
12終了飢病之灾寿四无量誰有老死之苦玉泉花園常吐妙法之音
〈六丁右〉
01芳樹金鳥恒宣道品□回使遊者唯仏菩薩嘆乞乃賢乃聖故能十方採
02法之党控白雲而逢道場九品往生之侶開紅蓮而就法席因覩三尊慈
03顔暦劫懸除耳聴八種法音恒沙福集巍々党々豈可称乎首称仏説
04雖二拠主為因言アミタ貫穿所証摂持所化総名為経故言遵仏説アミタ
05経文仏説アミタ経義疏（『大正蔵』巻三七・三五七頁中―三五六頁中）云并序西湖霊之崇福寺釈元照述一
乗極唱ハ終ニ
06帰シテ咸指於楽邦一万行円修ハ最勝ニシテ独推ツル於果ヲス弓ニ良以従レ因建願一康モハラニシテトテ
志一躬シタシクス行一
07歴塵点劫一懐済衆之仁一无芥子地モ非捨身之処……次正釈文□一又二初釈
08経題一二釈経文一初中此本名称讃不可思議功徳一切諸仏所護念一総十六
字
09経字ヲ一為通題一上十五字一為別題一上八字属教即経所レ説依正ノ荘厳称名
往生
10皆是ミタ修因感果威神願力ノ不思議功徳也下七字属機即依教起行専
11修ノハ成業衆聖冥加シテ摂持シテ不退直至菩提一也奘師唐訳即用本題一云称
12讃浄土仏摂受経語雖少異一義意大同対之可見今経秦訳隠一略本題一在
〈六丁左〉
01六方仏ノ後一即下云汝等衆生当信是等一拠宗取要一別建ニ此題一略有五
意二一則
02上符フ経首一経中唯示持名方法一故取仏名一用標題ノ首一二則下適機宜一ミ

夕
03名号ハ衆所楽聞故用標題一必多信受故三理ハリ自包含ハフシテ但標仏名一称讃ト
04護念ト任運自摂故四義存事シテ便易梵号兼含シテ可聞淳熟故五語従コフカム簡要一
05後世受持称道ニ不繁カラ故文源信永観与之全同高座入文等事　尋云依文分
06三序正流通諸師解釈如何答肇云判釈文義今釈此経遵道歟之□古亦為三
07節謂序正流通然大悲経開為五分一信分二証分三縁起分四正説分五奉
08持分今初信分即彼経云在々処々仏所説法謂如是我聞等二証分在々処々
大
09衆所集謂与大比丘是三縁起分亦名発起分即彼経云随其因縁随其由
10緒也爾時仏告舎利弗下為発起彼土何故名為極楽下為正宗今恐不然
11如来初略奉示次広分別此総是正宗非発起也四正説分爾時仏告舎
12利弗下是奉五イ持分即彼経云説此経已大衆歓喜頂戴奉持是也然経論
〈七丁右〉
01中初之二分並為証経非謬開合就信分文一復分為五一信二聞三時四主五
処文
02暁（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五〇頁中）云仏説以下是流通分恩（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三八頁下）云自下明正
宗第三正説有人自此以下為発起今謂不然此浄土之事
03如来已説々々故但舎衛国人有未聞者故无問自説若此下乃至无有衆苦
04名為極楽是発起分者如観経指西方日没等観亦応是発起序故知此
05下即為正説文測云第四則文解釈於此経中総有三
06分一教起因縁分二聖教所説分三依教奉行分親光釈云総顕已聞及教
07起時別顕教至及教起処教所被機即是教起所因不縁故名数教起因
08縁分正顕聖教所説法門品類差別故名聖教所説分顕彼時衆聞仏聖教歓
09喜奉行故名依教奉行分文台（『小経義記』、『大正蔵』巻三七・三〇六頁上）云自如是我聞一至諸天大衆
俱一序分也自爾時
10仏告一至是為甚難一正宗分自仏説此経已一訖経一流通分也取意照（『小経義疏』、『大正蔵』巻三七・三五七頁下）云次釈経文一大
11分三分初至大衆俱一為序分二爾時仏告下至是為甚難一為正宗分一三仏
説
12此経下至末文一流通分文肇暁測照信観皆如天台一
〈七丁左〉
01第一序分
02如是我聞等事　尋云諸師解釈如何答肇云経如是次釈智論云仏法如大海
03信為能入若人有信能入仏法是故信者聞之即云如是若不信者聞之即云不
如是
04故云如是以表信也人疑経未宣説預信何事答如謂指前題目及後経是
05仏所説非我自言聞者応信故真諦云如是者標所聞法明一部文理決可信
06従故云如是又仏地論有四義一辟喩二教誨三問答四許可如彼論説取許可
07為義故言如是真諦云如是者謂所信法体有二義一就仏解謂三世諸仏所説
08不異故名如是以同説故即知非要故言如是正以諸仏同説其法可信故言如
09是二就理解謂諸仏実相古今不異名之為如如而説不増不減決定可信
10故言如是我聞者次釈能聞人仏地論云如来慈悲本願増上縁力聞者識上文
11義故曰我聞問我聞者是誰答拠仏元意但結集者教作此言然大悲経第
12四仏将涅槃執阿難手付属一切仏法及第五巻教結集法用又処胎経
〈八丁右〉
01第五当結集時令阿難昇高座迦葉告言仏所説法一言一字汝勿欠漏菩薩
02蔵声聞蔵戒蔵等各集一処時阿難即云如是我聞即是阿難我聞也□々諸師
雖
03異解一大体不出之故略一也円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五一頁下―三五二頁上）云言如是者実相之理
无二相一称如一絶百非一
04曰是一経詮此理一故云如是一又如是只是指事之詞謂如是浄土之相是我親
聞

05故次句即云我聞一也我聞者我有三種一一見二慢三名字阿難於結集時已
　是
06无学人則見慢倶尽但為伝化一故順世間名字一称我一也
07一時仏在……給孤独園等事　尋云一時者意如何答円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁上）
　云一時者如是浄土之教我聞
08当于某年某月某日一也但云一時一者以諸国王制立時各不同故如此土四
　時彼方
09三際東夏以合朔一為月旦一西乾以既望一為月旦一西方尚爾四幾可知一既難
10以準定一故通言一時一耳　疑云以一時已下一可云発起序一歟答今師意爾
　也如観経
11釈義一云々　私云今師意未必爾一歟観経一時已下至而為上首一釈化前序一
　故
12取発起之文段給歟諸師多此経有証信一无発起云円測疏云経曰如是
〈八丁左〉
01我聞釈□就初分中諸説不同若依世親法花論開為六分一一是者信成
02就二我聞者聞々々三一時者時々々四仏即是主々々五舎衛国等処々々六
　与
03大等者衆々々也親光菩薩仏地論云中開為五分謂一総顕已聞二教起時三
04別顕教主四顕教起処五教所被機文慈蔵記云唯有証信无発起略
05説経故且如是耳文慈恩述讃云問何故此故此経不請自説答十二部
06中有无問自説経故如来与衆生一作不請之友不可怪嘖一亦可同一段文仏
07告身子過西方十万億等刹為発起於文无失然依報中初略指西
08方告永以驚時之衆心第三問答仏土得名極楽所以此即初也文但永観
09要記云此経有証信无発起一若依浄影意一以一時已下一可云発起序一取意円
（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五二頁下）云問
10仏説諸経皆有発起……何於此経全无由藉乎答夫大聖垂範一皆有
11興致一但事非特異一故訳者略而不叙一耳　又舎衛者何翻之歟答肇
12云次釈説経処此文有二一境界住謂天子所統之号即舎衛国是二
〈九丁右〉
01依止住謂如来所居之処即給孤独園也舎衛者此云聞物一法鏡経云我従物
02聞城一出詣勝氏林一十二遊経云其国无物　不有一天下聞之一故聞物一善
　見律
03云此処昔先多有道士修行於此住時王出遊見此地勝就之立都地従
04人国名為舎衛々々者即地主之名故文通賛（巻上、『大正蔵』巻三七・三三頁上）云舎衛者此中
　印度境憍薩
05羅之都城名為別布憍薩羅一故以都城一為国之称一文測云舎衛国者
06此云聞物一賢人宝物多出此国嘉名遠伝故名聞物国文一云舎衛国祇樹
07者第四教起之処梵云室羅代国此云聞物国文円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁上）云梵語
　舎衛此翻聞物一
08謂具足欲塵財宝之物多聞解脱之人一故也観云金剛疏云真諦云彼国
09正音応云奢羅摩羅死底此云好名聞国一昔有仙人一有好名聞一因以名一也文
10旧翻為聞物国一遠聞諸国故文　又舎衛与室羅筏城一同異如何答有云
11舎衛国内室羅筏城也　又祇樹者梵語一音中何歟答梵漢兼称也
12祇者梵語也樹者漢語也　又祇樹給孤独園者其義如何答智円疏（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁上）云
〈九丁左〉
01祇樹等者即祇陀太子所施之樹給孤長者所施之園祇陀此云戦勝一
02波斯匿王太子生時王与外国戦勝因立其名給孤独者此方語梵
03云須達多一翻為善一施以善行施一故郷人美レ之名給孤独一也少而无レ父
　曰レ孤
04老而无レ子曰レ独以此長者常給施一此人一故樹先園後者賢愚経云舎衛
05国王波斯匿有一大臣名曰須達文君尊臣卑故文通賛一（巻上、『大正蔵』巻三七・三三頁上）云祇

樹者応
06云誓多林言祇樹者訛也誓多云戦勝此即大子之名太子生時隣怨至主歟
07戦而得勝遂以為名給孤独者是蘇達長者此云善施……旧云波斯匿王
08是也此名勝軍文孟蘭盆経疏宗密（巻下、『大正蔵』巻三九・五〇七頁下）云祇陀太子之園長者問レ
買ムト太子
09戯テ言側ソハタテテ布黄金ハ満ト即売レ之長者便欲交付太子云是戯言ナリ共請断
10事之人被レ断令依先ノ語長者載ハコンテ金側布唯余アマス一隅太子見テ其不惜
11財宝知テ仏殊勝ト遂施余之地置シ立門屋シテ施国中ノ樹以為林蔭二人共
12成精舎請仏居之故云祇樹等也文通讃疏（巻上、『大正蔵』巻三七・三三頁中）云布金満地高
敷五寸即売之文
〈一〇丁右〉
01観云又涅槃経云祇陀長者自造門楼須達長者七日之中成立大房足三
02百間禅坊静処六十三所冬屋夏宮堂イ各々別異厨坊泥室洗脚之処大
03小清廁无不備足已在此勝処説故可取也文　尋云給孤独園広狭如何答測
04云真諦三蔵云須達多此云善恵為過去鳩留村駄仏以於フイテ此地起精舎
爾時
05地広卅里仏及衆寿四万歳須達爾時名毘沙長者以金板布地宝衣
06覆之而為供養俱那含牟尼仏時仏及人寿三万歳須達爾時名大家主
07長者以銀布地而為供養爾時此地広卅里迦葉婆仏時仏及人寿二万歳
須
08達爾時名大幡相長者以七宝布地々広廿里釈迦牟尼仏時仏及人寿百
09歳地広十里以金餅布地周満其中皆厚五寸置園奉仏後弥勒出時仏及
10人寿八万歳地広卅里以七宝五寸置園奉仏須達爾時名為儴佉出家
11修道獲阿羅漢果文　季孟声聞衆等事　与大比丘衆……五十人俱等事
12尋云比丘翻菩薩人数其義如何答肇云与義兼人大者謂名称位高善
〈一〇丁左〉
01見律云従中功徳極大者名大最少者名須陀洹大者名阿羅漢
02比丘衆多故言大比丘者智度論云此有三義一比丘名為怖魔二名乞士能
03離邪命清浄仁乞以中資身故言乞士邪命者一離口邪命不以梵
04呪妄説吉凶得次生命二離身邪命不行合薬書符卜筮耕植及手
05作器得価資養三離身口邪命不誦禁身呪イ不燃火亦不作観星宿
06博蝕亦不下口種作亦不方口為他駆使若作此治身名為邪命比丘
07之人不行此事応清浄行故今行是名為乞士三比名破悪丘名煩悩能破
08煩悩故名比丘衆者比丘非一或多和合故名為衆文肇云千二百五十人者
09唱数也如来所度三迦葉二外道師弟合千二百五十人為報仏恩恒随給
10侍俱者善見律云共在一処名之為俱台（『小経義記』巻三七・三〇六頁中、『大正』蔵）云千二百五十
人俱者三迦葉衆
11共有一千舎利目連二百五十常随聖尊為証信衆文円（『小経疏』巻三七・三三頁中、『大正蔵』）云
大者梵云摩訶而含
12三義大義多義勝義此諸尊者悉為天王大人所敬故言大偏解内外典
籍
〈一一丁右〉
01故言多超出九十五種外道故言勝文円（『小経疏』巻三七・三五頁中、『大正蔵』）云比丘者因果
六義因名乞士怖魔
02破悪果号ス応供殺賊无生……僧者具云僧伽此翻衆和合謂四人以上乃至
无
03量事理二和无有違浄故名衆　尋云阿羅漢名義如何答一云阿羅漢者
04翻応若依唯識論以三義明一皆已永断煩悩賊故二応受世間妙供養故三
05永不復受分段生故釈曰応此三義故名為応文　尋云阿難ハ初果也何云皆是
大
06アラ漢歟答爾也但諸師皆為会釈肇云今別十六人其中阿難雖非羅漢
07以徳望深重故亦衆所知識在此会文慈恩同之　尋云知識者意如何答肇□衆

08所知識者此挙名聞法花論云諸王々々子大臣帝釈梵天等皆知識故又声聞
09菩薩仏等皆善知識又釈者一切凡聖識其形容一知其種姓一故文恩（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三一五頁中）云衆所知
10識次釈挙位一初挙徳位即阿羅漢次挙名聞一即衆所知識文大智（『小経義疏』、『大正蔵』巻三七・三五八頁上）云人天衆
11知其徳業一識其儀貌一故云衆所知識文称讃経晴邁疏云皆是尊宿声聞
12謂年尊発宿形□モ衆首也慈蔵記云衆所知識者既是羅漢故実徳内

〈一一丁左〉

01外名善彰故天人普識猶如日月在天衆人之所作望故曰知識也□
02長老舎利弗等事　疑云長老者心如何答肇云善見律云老者而言大徳一小
03者而称長老一増一阿含云仏言自今已後諸比丘不得君卿相向大称尊小
04称賢長老有三義一年老二知法三善作又智度論云引宝頂普華菩薩
05呼舎利弗為老年一今称為長老一一是年尊二為知法如俗有先生称長者之
06名謂讃美其徳一不言其諱一文慈蔵記云長老者有二義一年少長去故名
07長老二寿命久邁故名為長老云々大智（『小経義疏』、『大正蔵』巻三七・三五八頁中）云徳重臘高故称長老文
08観云内秘菩薩外現声聞位高可崇故呼為長老也又云摂大乗論明身子是化已上
09又已下所列十六人者千二百五十人之内歟答不必然一内外間雑也肇云千二百五
10十人者唱数也如来所度三迦葉二外道師弟合千二百五十五人為報恩恒随
11給侍今案名諱一事恐不然即知羅睺大迦葉等常在其中豈亦是彼之
12徒属也文　私云大迦葉等者等之言摂非外道歟　又舎利弗等一々翻名如何答舎

〈一二丁右〉

01利弗者肇云増一阿含云富楼那問舎利弗諸人称仁者何等号答我名優
02波提舎云弘母名舎利従母受称大論云其母目如舎利鳥花厳入如来徳智不
03思議経云舎利此云鸜鵒弗多羅此云子故涅槃経云如舎利弗因母立名又羅
04云忍辱経名鵞鷺子又中本起経云舎利弗者本名優波賛仏言汝与目
05連音同発願云我成道為左右弟子今既遂心優波讃者高世之号花而不
06実汝本願云字為舎利弗婆沙論云舎利翻為身弗之言子名為身子父名
07優波提々舎摩訶言大文測云梵云奢利弗怛羅言舎利弗者訛也舎利云
08鶖即百舌鳥亦曰春鶯弗但羅言子以母才弁喩如鶖鳥此是彼子以
09母離之故云鶖子又云過去身為瓦師値釈迦仏発願云作釈迦弟子但今
10者亦符法蔵名優婆提舎以能論義故兼得彼名文円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）云舎
利弗此翻殊子一
11亦身子以其母好身形而聡明之相在二于眼珠因名珠名身也尊者是珠
12所生故名珠子円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）云摩訶一大一目揵連云胡豆一亦采菽上
古有仙一隠居求志

〈一二丁左〉

01采菽豆而食尊者是彼苗裔也同姓者衆標大一以別也円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）
云摩訶迦葉
02此云大飲光一古仙身光翕赫呑飲飲光使不得現一従此命族
03円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）云賓頭盧頗羅惰或云賓度羅跋羅惰闍或云軍屠鉢漢
皆梵音楚
04夏也賓頭盧翻不動頗羅堕真諦三蔵翻揵疾一或利根或広語本
05行集翻重幢一婆羅門十八姓中一姓也尊者是彼種族故円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）
云迦留陀夷
06云黒光一或麁黒以其形醜黒一故円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）云阿兜楼駄云无貧一
亦无滅一以其

07常富足故　如是等諸弟子等事　尋云弟子者意如何答円（巻三七・三五三頁下『大正』蔵）
　云如是下総
08結弟子者学居師後一故称弟一解従師一生故称子弟則顕師之謙譲一子乃明
09資之尊仰一摩訶目揵連者肇云文殊師利問疾経云大目揵連此云蘿
10茯根其父好噉因物為名涅槃経云目揵連是姓与過去因果経同此云読
11誦字拘律（建）陀因祷拘律陀樹而生故真諦云応名勿伽羅此云愛胡豆
12々々即緑豆也上古有仙唯会（食歟）此豆是彼仙種因姓為名（文）測云大目乾
〈一三丁右〉
01連音訛也此云採菽氏上古有仙居山寂処常採菉豆而食因以為姓
02名尊者之母是彼之族取母氏姓而為其名得大神通簡余此姓故云大
03採菽氏従父本（文）摩訶迦葉者肇云此翻為飲光真諦云其先人大仙（イ本）
04種身光明朗能飲化光皆令不現是彼仙種故名飲光但迦葉之身
05□勝金色飲光之号殊祖未詳文殊問経翻為大亀氏恐誤耳毘婆沙
06論云迦葉多有故以大標之以五事勝故名大一富長者生故二能大富貴
07豪族出家故三能行頭陀少欲知足故四国王天竜鬼神多知識可供養
08故五捨世間大利養行少欲知足行乞食故又迦葉本起経云王舎城内
09有大富梵士名尼拘律此□无志有子名畢撥羅大迦葉々々是姓畢鉢
10羅是字仏弟子中頭陀第一仏常見来分令令坐（文）天台（『小経義記』巻三七・三〇六頁中『大正』蔵）云
　翻畢鉢羅
11亦云亀氏又曰先波（文）測云梵云摩訶迦葉婆摩訶大也迦葉婆者姓也此云
12飲光ハラ門姓（文）照（『小経義疏』巻三七・三五八頁中『大正』蔵）云迦葉此翻大亀氏其先代学道霊亀
　負仙書而応
〈一三丁左〉
01従徳命族（文）摩訶迦旃延者肇云摩訶迦旃延真諦云此翻思勝古昔
02有仙々由具思問思勝余人故是彼仙種旧号扇縄将応語意応名
03扇縄義将稍切其父早亡唯母孤養恋子（イ）不再醮如扇繋縄又釈旃延
04是姓扇是字（文）摩訶拘絺羅者肇云此云大悉々骨高大是舎利弗舅
05甚大聡明初為外道師名四長爪梵志（文）台（『小経義記』巻三七・三〇六頁中『大正』蔵）云摩訶倶絺羅
　弁才无滞此
06翻大膝（文）一云梵正音摩訶倶慧取羅此反大膝云盍大故此舎利弗母舅共
07仏論議語解得果謂立宗言一切不忍仏語言汝忍此心不耶若謂忍者即
08違自言若不忍者与余无別等如智論也（文）照（『小経義疏』巻三七・三五八頁中『大正』蔵）云此翻大膝
　（有云謬蓋大故）舎利弗舅
09与姉論議常勝姉々孕不勝知懐智人遂往南天竺読誦衆経无暇剪
10爪時人呼為長爪梵志（文）離婆多者恩（『小経義疏』巻三七・三二六頁上『大正』蔵）云離婆多者文殊問
　経翻為常
11作声未詳其義相伝云依智論此翻仮和合謂仮他死人頭手足而成
12体故案彼論第十四巻汎説一人不名字未知是此（人歟）不云有人路行夜寄
〈一四丁右〉
01神廟中宿一老鬼持一死人来欲潔即被一小鬼欲奪各言我許份競无定
02乃引彼人為証彼人思惟我実亦死妄語亦死寧実不虚即云老鬼将
03来彼小鬼発怒便擒（愉歟）彼死人挽取臂咬乃至頭脚老鬼慚愧此人為
04証便取死人手足及頭挾着天暁而去口云是我身為非我身遂至一伽藍
05問僧是我不因問自説如上之事僧云汝身本来四大五陰仮和合成何
06但今日方知合作是語已即度出家後得羅漢果（文）測云離婆多訛也有云
07仮令即智度論云説二鬼食人事之（也歟）（文）所（類歟）言離婆多者梵正音頡麗
08伐多此云室皇北方皇也礼之得子因以為名一云仮令如智度論説有一人
09持不妄語戒入一空場而宿爾時鬼負一屍至後大鬼来言此我将来小
10鬼言我将来即以其人令則爾時窃作此念我尽寿持不妄語戒若如
11是言即彼大鬼殺若別言者即犯於戒然寧令前死即言小鬼将来
12爾時大鬼怒抜頭而復小鬼取屍頭続大鬼又抜両臂小鬼又以屍臂

〈一四丁左〉
01続大鬼又抜両膝小鬼又続爾時取抜頭等僉已而告其人爾時思惟
02自身為有為无如何成干日暁已即出至於村辺寺々僧問言汝不来答
03我有耶无耶又問曰今問汝所来従何所来答曰我辟有耶无耶爾時
04僧作此念此人既成就无不観方便即告言汝身无始以来都无所有
05但有因縁和合仮名為身耳如是言即便悟解和合无我而得道果文
06鈔廿（『演義鈔』巻八四、『大正』蔵巻三六・六五八頁上）云十一……皆言我先持来二鬼苦言取其分判此人
実見小鬼持来及被
07鬼問窃自思惟……遂如実答小聖者持来……言仮猶合初常疑云若我
08本身眼見抜去若是他人身後随我行住疑或猶預逢人即問汝見我
09身否衆僧見之云此人易度而語云汝身本是他之遺体非己有也悟此
10仮合因即得道以常問故亦云常作声也文周利槃陀伽者肇云仏花
11厳入如来智徳不思議経云翻為継道善見律云翻為路辺生首長者有
12一女与奴私通遂逃他国久而有孕垂産思帰行至中路即産其子因
〈一五丁右〉
01名路辺生如是三度凡生二子（二イ）長名般陀弟名周利般陀伽兄弟相継
02路生応兄名路辺弟名継道即周利般陀伽也之其人父母併亡兄厭
03家入道其弟尋復出家性既愚鈍兄怒之曰汝不能持戒又加嬾堕幸即
04帰牽出祇洹門外啼泣如来見之知根持（将歟）熟喚之在側付掃箒与汝誦
05此名々々亦名除垢数日誦之得掃忘箒乃即思惟除垢之義除垢応得清
06浄垢者是身中結縛思惟悟解成阿羅漢処文経云其人過去遍通経典蔵
07秘不説臨死悔恨由秘惜故今闇鈍臨死悔故今経廿四年訖得二字又五
08百弟子本起経又云我昔放猪駆欲渡水縄繋猪口不得喘息中流死以
09是因於是後身猶常啼鈍体作若干変文恩（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三二六頁中）云……処々
経々其人過去遍
10通経論蔵秘不説臨死悔恨以我解経論不為人説用解何為由秘惜故今
11則暗鈍以臨死故今廿四年記得五字因之得悟文測云梵云周梨槃陀迦
12此云蛇奴或云路生若依本起経或反道辺有一長者女□然奴為夫々与
〈一五丁左〉
01妻巡後時懐妊還家欲産来向家道在辺宿即生一児夫復進□
02即将而還後即懐身如前道辺亦生一児是名摩訶般陀此云大道辺
03弟名周梨槃陀此云小道辺復夫与妻将還家時父長者但止二子而
04其夫妻煩而発遣後時二子自往仏所了証漏尽弟極鈍根不能得
05道欲還家時仏自死田住後時方聞一偈悟道何故此人如是鈍根而後得
06道此人前生作大法師多解義理然於一時隠一微義不為他説如是鈍根
07前大法師故証漏尽一云此反蛇奴又云小道辺生事如両巻記此人聞除垢
08頌而入聖流兄名摩訶那陀弟名周梨槃陀広如周梨槃陀本起経文
09円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）云諸経律謂周利槃特是也難陀者恩（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三二六頁中）
云難陀者大威徳陀羅尼経云
10有四一者但言難陀此云喜二修難陀此云善喜三阿難陀此云歓喜四婆難陀
11此云賢歓喜今言難陀者即仏之親弟姨母所生孫陀羅堵也所以名喜
12時白浄王適有悉達棄家入道无人嗣位心常致憂及生難陀儀貌似兄
〈一六丁右〉
01堪継供（洪イ）業故心小喜別訳阿含云仏言我弟難陀者能摂諸根不著六尽
02飲食知節裁以上飢故名難陀又増一云身形端政与世殊異諸根
03寂静心不変易故名難陀五百弟子本起経云由過去施僧煖浴室及
04一洗比丘僧願得无垢身端政色妙如花又曾修辟支仏塔又見迦葉仏
05塔建立刹柱安承露槃以是諸因今生釈氏得為仏弟子有大人相長一丈
06五尺二寸文一云難陀者翻歓喜音声既好令生他善故仏親弟子長一丈
07五尺二寸仏到本城二日度之大膝生主之所生也即是摩訶婆闍婆提之
08子文照（『小経義疏』、『大正』蔵巻三七・三五八頁中）云難陀此云善歓亦翻忻楽本牧牛人以牧牛試
仏々為説法忻楽

09得道故有処名牧牛難陀或□即律中跋難陀也文阿難陀者肇此云歓喜也
10又次世々修忍辱故身端正人見歓喜因以為字観仏三昧経云仏言阿難汝名
11歓喜依名定実増一云阿難有四希有令人歓喜一黙然至大衆中見者皆喜
12二正有所説聞者亦喜不説黙然人見亦喜三行勤時見衆□生歓喜偈仰

〈一六丁左〉

01観視无厭足四正有所説聞无厭故心歓喜大論云昔依長者因施誦経
02沙弥食遂発大願小師成仏願我為多聞弟子今如来所有法蔵悉能受
03持如泲瀉水置之異器文恩（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三二六頁下）云阿難陀者智度論云如来得
道夜生
04初有天人空中告白浄王曰悉達太子昨夜明皇出時成一切智王
05聞歓喜又王第三弟斛飯王復是其日来啓曰昨夜生一男王曰貴
06弟生男我心歓喜今日大告爾時生子応字阿云歓喜……已下文如上測云阿難
07陀此云慶喜但言阿難翻喜智度論第三巻云阿難得名有二先世因
08縁及父母作釈迦先世作瓦師名大明爾時有仏名釈迦弟子名舎利弗
09目連阿難仏与弟子俱到瓦師舎一宿瓦師布施聖草灯明右密従三
10事供養発願者我於当来五濁世出成仏名釈迦弟子名舎利弗目連阿
11難世云忍辱除嗔以是因縁故生端正父母以其端正見者皆歓喜故阿難
12々々此云歓喜父母作字故初有一王名号草王及后至老年時入山修道

〈一七丁右〉

01依樔而住為猟師射王及后二人一時著箭傷已各出一滞血其血入地
02変生茸蔗双一茎生男一茎生女互為因縁苦為夫婦世々相続
03生四子初生名茸蔗乃至師子頬王々々々々生四王一浄飯王二百飯王三
04斛飯王四甘露飯王有一女名甘露味浄飯王二子悉達難陀白飯王
05二子跋提々沙斛飯王二子提婆達多阿難甘露飯王二子摩訶男阿泥
06盧豆甘露味子有一子名施婆羅仏成道時生々歓喜故名歓喜皇文
07一云阿難陀者反慶喜世尊成道内外咸慶当喜時生故浄飯王目之
08為名廿五年方仏侍者如涅槃経及像正説言文羅睺羅者肇云羅睺羅
09此云覆障亦云曰雲生五百弟子本起経云我昔為王請衆僧会者後園
10忘六日不与其食然我无悪心以忘因縁堕黒縄地獄経六万歳最後受
11胎六年乃至故云覆障謂以被胎膜不覆障也仏出家載羅睺乃生諸釈
12皆疑非釈種仏成道後還宮説法其妻耶輸陀羅此云□声欲自雪身

〈一七丁左〉

01知目清白乃以歓喜九与羅睺令奉汝父仏知其意乃変弟子作仏身
02羅睺献奉而意不錯仏既受已化仏皆滅諸釈方信実是宮生入大乗
03論云羅睺久住世者是変化身文測云梵云羅怙羅此云執日旧云羅睺羅
04翻為障蔽亦云覆障非也梵云笈房鉢底此云牛相或云牛主文
05一云羅睺羅者此云執日反障蔽非也過去作国王期与食仙人待我入宮
06忘逞六日由罪業五百世中生々逞胎六年此耶輸陀羅之中子非瞿夷
07子仏初出家夜始今胎於初成道夜生羅逞於六年方出胎故諸釈
08氏共言定非悉達入子即掘作大坑以陀羅木積於坑中以火焚之
09則将耶輸陀羅至火坑辺時耶輸陀羅見火坑已方火驚怖抱児長
10嘆念菩薩言汝有憐愍一切天龍鬼神咸敬於汝今我母子薄於祐助无
11過受苦則向仏方所一心敬礼復拝諸釈氏合掌向火而説実語我此
12児実不従他此言不虚者火当消滅即入火中而此火坑反為水池自

〈一八丁右〉

01見已身処蓮花上爾時諸釈氏倍加恭敬浄飯王愛重深厚不羅睺
02羅乃解秋念爾時白浄王偈作於仏遣使請仏憐愍故還帰本国来
03到釈宮仏及千二百比丘皆如仏身光明无異語羅睺誰是汝父往到
04其辺羅睺羅礼仏已説正在如来右足辺念イ本如来即以无量劫中所修功徳相
05輪之手摩羅睺羅頂事出宝蔵経及智度論文円（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三五三頁下）云羅睺羅云障日蔽此修
羅之名以其能
06障蔽日月故此尊者障仏出家如修羅障月故乃如来之嫡弟也

07照（『小経義疏』巻三七・三八頁中―下、『大正蔵』）二云羅睺羅此云覆障仏□嫡子醻往業故在胎六年故言
　覆障真諦云羅睺
08本言修羅能手障日月応言障月仏言我法如月此児障我不即出家世々
09障我世々能捨故云覆障文観羅睺羅者此云覆障三蔵云本是阿修羅名
10若具翻之応云障月仏子又云宮生略抄文憍梵婆提者肇云仏花厳入如
11来徳智不思議経云翻為牛主大論翻為牛呵シト処々経云昔作比丘摘他一
12穂穀観其□熟五百生来与他牛償力而今得道足由似牛食後即呵
〈一八丁左〉
01因名牛呵分別功徳論云時人毀障得罪仏合居忉利天上尸利樹下坐解
02律第一仏涅槃去後結集法時迦葉令命之今閻浮提有大法事問曰仏
03槃涅槃耶答以般涅槃我和上舎利弗□所答先仏涅槃乃歎曰我大師已滅度
04和上復涅槃世間眼滅不能復下即化火焼身四道流水注閻浮提法集
05衆中水中説偈言憍梵鉢題頭面礼妙衆第一大徳僧聞仏滅度我随
06去於是天上般涅槃大論亦作如是説文則云憍梵婆提訛也過去因摘一
07茎禾数顆堕地五百生作牛償他今雖人身尚作牛蹄牛呵之相因号
08為牛相比丘文一云梵正音笈房鉢底此云牛相文賓頭盧頗羅堕者
09暁（『小経疏』巻三七・三四九頁上、『大正蔵』）二云賓頭盧此云耆年波羅堕此云利根文恩（『小経疏』巻三七・三二七頁中上）云賓頭盧頗羅堕案請賓
10頭盧法云賓頭盧是字未詳其義頗羅堕是姓此曰利根但一切新作
11屋宅浴室斎会新衣上眼先奉先イ本請凡欲請者当於静処焼
12香礼拝向天竺国摩梨山至心称言大徳賓頭盧頗羅堕誓受仏
〈一九丁右〉
01教敕為末法人作福田者願受我請毘奈耶律云其人本貧木旃檀鉢
02為樹誓長者現神足往即仏責之一不聴住此界即往西瞿陀尼教化衆
03生三摩羯経云仏欲化彼事裸形外道難陀国王故令諸弟子皆現神変
04一時至彼受其不請時賓頭盧在於山中正縦衣乃妄去忽憶著急去歟以針判
05地縫猶二イ著衣運神足即往其山以針線不牽亦随後去時彼国有孕
06婦見一山大発蔽空而至惶怖堕胎仏遥知之令目連往語汝後々イイ何山也
07賓頭盧廻顧見之把得此一擲八千里仏語之曰我教化衆生皆欲得涅槃今汝
08失期又殺一人々命既重我所不喜汝従今後不得復随我食及預衆留会
09汝作後世福田至弥勒出乃得滅度賓頭盧問段憂悩自責食訖入山入
10大乗論云阿羅漢无煩悩者与八住菩薩同修如意足能随意住□即賓頭盧
11是然是変化身非実身文測云賓頭盧此云耆年々高徳大亦□上座文
12観云賓頭盧頗羅堕者性頗羅堕俗也真諦三蔵云翻為利根仏人六性波
〈一九丁左〉
01羅門中一性也上已天台（『小経義記』、『大正』巻三七・三〇六頁中）云賓頭頗堕翻走閉門上已有疏云賓頭
　盧頗羅堕者
02未詳其義頗羅堕誓性此曰利根一切新作シム屋宅浴室斉会……中間如恩釈
03願受請上已西明元暁二師賓頭盧与頗羅堕各別釈之文迦留陀夷者肇
04法花経云此名黒曜増一阿含云迦留陀夷其身極黒夜行乞食時天
05大闇而至他屋有聞電光彼家婦人懐孕電光中見謂之黒鬼怖
06而堕胎乃謂之曰汝何鬼耶答我瞿曇弟子今来乞食彼女悪罵如
07来知時即敕比丘不遇中食亦不得預乞食文暁（『小経疏』巻三七・三四九頁上、『大正蔵』）云迦留陀
　夷此云黒上此
08是悉達未出家時之師也文恩（『小経疏』巻三七・三二七頁中、『大正蔵』）云正法花云此名黒曜毘奈
　耶律云名黒光文
09測云此云黒色此人悉達在宮為師也亦反端正相好文一云迦留陀夷者翻
10黒色従此制非時食者一也文観云迦留陀夷者迦留此翻時陀夷名之為
11起十八部疏云迦留者累陀夷者上謂悉達太子宮時師也文
12摩訶劫賓那者恩（『小経疏』巻三七・三二七頁中、『大正蔵』）云此□房宿相伝云以其勧入道門在僧
　房宿仏知

〈二〇丁右〉

道根将熟即自化為者比丘与之共宿因為説法而悟聖道」故名房宿亦
名房皇因祷房皇而生故以為字文照（『小経義疏』巻三七・三五八頁下）云此翻房宿音秀祷星感
子故
以為名又初出家欲往見仏夜雨寄陶師家宿又一比丘随後而来前比
丘推草与之在地而坐後比丘即為説法豁然得道後比丘即是仏共仏房
宿音闇従得道処為名文薄拘羅者肇薄俱羅此云善容謂好容儀過去曾
持一不殺戒今得五死報一釜煮不死二放金博不燋三堕水不溺四魚呑
不煙五刀割不傷五百弟子自説本起経云我昔曾施病僧薬及施沙
門呵梨勒九十一劫以来不堕悪道今年一百六十未曾有病又分別功徳論
云薄拘羅昔作長者因酔入寺唱言諸比丘有不須者当至我家明旦
有一比丘来索薬言患頭病長者□此鬲上有水仰政頭遂病如即施一
呵梨勒菓比丘服已得差由是因縁九十一劫未曾有病至年八十出家
学道経今八十年合年一百六十中阿含云我持糞掃衣来八十余年

〈二〇丁左〉

未曾憶受一居士請及衣未曾割截作衣及債他作衣未曾針縫逢
及針綖表乃至一縷未曾従一大家乞食未曾視女人面及入比丘房
亦不共語未曾畜一沙弥不曾暫病頭病亦不服一行薬八十年来若跏
趺坐未曾倚服雑阿含云仏滅之後時阿育王遍礼諸塔広施珍宝聞薄
拘羅少欲第一乃施一銭時彼神還擲出之王言善哉真実少欲一銭亦不
受文慈恩釈全同也測云梵云薄矩羅此云善容言薄俱羅訛也
毘婆尸仏入涅槃後一比丘甚患頭痛善容時貧人持一訶梨勒施比丘々々
服訖病即除愈由施薬故九十一劫天上人中受福快楽今生婆羅門家
其母早亡遂遇後母々方便殺之経五不死又持不殺戒得五不死一釜煮
二鏊博不死三堕水不溺四魚呑不死五刀割不傷後求出家得阿羅漢出
家八十曾不頭痛目不視女人而亦不入尼寺不為女人説一句法後无憂
王巡塔布施知其少欲但施一銭塔踊置地猶久不受方知少欲如

〈二一丁右〉

付法蔵伝説此因縁文　玄一釈全同之　阿兎楼駄者肇云亦云阿泥盧豆亦言阿
兎楼駄此□如意是白浄王第四弟甘露王之子過去曾以一食施辟支
仏十五劫来天上人間受勝妙楽末後生此釈種之中得阿羅漢不須如意
因以為名文暁（『小経疏』巻三七・三四九頁上、『大正蔵』）云此云无貧或云如意文恩（『小経疏』巻三七・三二七頁下、『大正蔵』）
云此云如意正法花云名淳兎文
測云梵云阿泥律陀此云无滅仏之党弟阿兎楼駄也夜毘字亦云如意云々
一云梵正音阿泥律陀反无滅仏之党過去盗賊取物闇故以天之本而正
灯時火明照珍宝即作此念他仏自物如是供養不亘盗賊取故捨而来彼
時増明故九十一劫常得明眼今此生中天眼第一大阿羅漢智度論云阿尼盧
豆大阿羅漢暫観見之千界観見二千界問彼論第五巻云大阿羅漢小用
心見二千界大用心見三千界何故□阿羅漢天眼第一見二千界答約小用
心而開暫訪故後文但言見二千若大用心即見三千界若不爾者不応
天眼第一故又云如意由供辟支仏資財如意故文観云阿兎楼駄者此

〈二一丁左〉

翻為如意亦云无貧西明疏亦加二人謂捺阿迦与難達羅難□阿也文
鈔少（『演義鈔』巻八四、『大正蔵』巻三六・六五八頁中意）云亦云阿泥楼豆或云阿那律亦云阿泥嚕多並梵音
楚夏皆云无
滅亦曰无貧言一食之施者賢愚経説弗沙仏末世時飢饉有辟支仏
名利咤行乞空鉢无獲有一貧人見而悲悼白言勝士能受稗不即以
不嗽奉之食已作十八変後更採稗有克跳狍其背変為死人无
伴得脱待闇還家委地即成金人抜指随生用脚還出取之无尽悪
人告王欲来集之俱見死屍而其覩即是金宝現報若是九十一返
即果報也又其生已後家業豊溢日夜増父母欲試之蓋空器皿往
諾発看百味具足而其門下日々常有一万二千取債六千還直出家

10已後随不至処人見歓喜欲有不須如已家无異即世尊之党弟斛
11飯王之次子也　菩薩衆事　并諸菩薩摩訶サ者肇云次明菩薩衆
12又有三初標類次列名後結定并諸菩薩摩訶サ次釈標類智度論云

〈二二丁右〉

01本応名菩提サタ摩訶サ今釈云菩薩謂无上智恵亦名為覚亦名為道サタ
02言衆生或言大心勇猛今菩下除提薩下除埵故名菩薩道行経云仏言是
03人於一切法悉覚悉了悉知故名菩薩天上天下最尊最勝名摩訶サ云文
04文殊師利王子者肇云文殊師利法王字次釈名案梵本六曼殊室利此
05云妙徳新訳称讃浄土経云名妙吉祥悲花経云過去有仏名宝蔵如来
06将転輪王第三子照明智慧発大願修菩薩行彼仏語言我今字汝為
07文殊師利今依旧因為名問彼真菩薩為示現人答依首楞厳経云過去
08不可思議阿僧祇劫於此南方作仏世界名平等仏号龍種上尊王即文殊
09也央掘魔経云今此北方有仏之刹名常喜仏号歓喜蔵摩尼宝積如来
10処胎経云文殊本為能人仁イ師今為仏弟子二尊不並化故我為菩薩又菩薩瓔
11珞経云過去久遠有仏名大身者文殊師利是也文殊仏土経云却後於南方
12作仏名普現世界名離垢心勝阿弥陀仏国又文殊般涅イテ槃経云仏言我滅

〈二二丁左〉

01度後四百五十年文殊従雪山出趣本住処舎衛国多羅聚落現
02其妙身三十二相八十種好施大光明奄然光滅イ本留全身舎利一云丈六尺如
03浄流離内外明徹法王子者謂従仏化生従仏口生仏為法王人為法子彼
04菩薩堪酮聖種故言法王子仏地論云従世尊口正法王生イ故能紹仏種令不断
05絶名法王子十地論云十地菩薩名法王子地何以故次紹仏位故何況其人
06是過去仏也但爾示イ為菩薩堪継法王故放鉢経云釈迦仏言我今得仏是文
07殊恩文殊是我過去本師過去无量諸仏皆文殊弟子当来亦爾文
08殊者乃仏道中之父母也文阿逸多菩薩者肇云阿逸多菩薩次釈新訳称
09賛浄土経翻為无能勝或言弥勒此言慈氏由彼多修慈心多人慈定修慈
10心多入慈定修慈最勝名无能勝文測云阿逸多此云无能勝此菩薩慈悲
11摂化能勝余故文天台（『小経義記』、『大正』巻三七・二〇六頁中）云翻无三毒文一云阿逸多者此翻无
能勝次当
12作仏无能勝故復名弥勒即従姓為号文乾陀訶提菩薩者恩（『小経疏』、『大正蔵』巻三七・三二八頁中）
云未

〈二三丁右〉

01詳所訳然称賛浄土経第三菩薩名不休息未知為イテ即翻此菩薩乾陀訶提為
02当非也若是不休息即応救生不絶名不休息正法花説名不冥遠文
03暁与測玄一西明同云此云赤色文照（『小経義疏』、『大正』巻三七・三五九頁上）云此翻不休息衆生
无尽修因感果无
04窮已故文常精進菩薩者肇云次釈正法花云名応時菩薩涅槃経云如是時中
05任住イ修布施乃至修智恵随時不懈名常精進文観云以衆生常有諸苦是故
06大士恒順済抜故言常精進文　天人衆事　及釈提桓因等无量諸大衆
07俱者肇云智度論云釈為能提為天桓因為主謂能為天主又釈是字提
08桓因是号称憍尸迦者彼於往在摩伽陀国作婆羅門名摩伽憍尸迦
09有大福徳与卅二友修迦葉仏破塔基俱生忉利天摩伽為主称帝釈也
10仏呼本性故言憍尸迦或云千眼以其過去聴俊断千事故称千眼問
11是何位人答有言須陀洹有言是大菩薩有言是凡夫所言等者謂諸兼上
12及下其数非一故言无量諸天大衆俱上来引証分亦云証信序文恩釈全同

〈二三丁左〉

01測云釈云釈迦提桓因陀羅釈迦此云能提桓此云天因陀羅此云主提云能天
主
02无量諸天者欲色无色諸天応知文一云述云第三雑類衆梵正音釈
03迦提婆因陀羅此反能天至又云隋尸迦此従過去姓名也言等者取人非人也
04言无量諸天者挙地居天主通取諸天言大衆者余人非人一切大衆是
05故下云无量天人阿修羅等故瑜伽第三云衆有八種一刹帝利衆二婆羅

06門衆三長者衆四沙門衆五四天王衆六三十三天衆七夜摩天衆八梵衆上
07説三衆中随応可知文照（『小経義疏』、『大正蔵』巻三七・三五九頁上）云三十三天中釈提桓因具云釈
　迦因陀羅此翻能
08天帝即三十三天主今言帝釈即花梵双挙大梵四王天衆甚多不復
09尽挙故云无量文兼道俗四衆龍鬼八部故云大衆倶序中従略文見
10流通文
11已上経序分竟

*1『宗学院論集』九一号所収、二〇一九年。
*2以下、筆者は『法事讃光明抄』に対して『法事讃疑芥』の呼称を用いる。その理由等については前掲拙稿を参照されたい。
*3『仏全』巻一・三四三頁上―三四四頁上。なお、『仏全』所収本『長西録』を見る限り、数点の問題を指摘できる。まずは、仁岳『阿弥陀経新記』（以下、『仁岳新記』と略称）である。『法事讃疑芥』中には「新記」や「疏」の名称で引用されており、一先ず同一書として計上したが、『長西録』には『科文』・『疏』二巻・『指論』二巻の三書が記されているものの、これらの別称を含め、「新記」なる書名は確認できない。外に目を向ければ、『楽邦文類』には「阿弥陀経新疏序　浄覚法師仁岳」（『大正蔵』巻四七・一六六頁下）と、仁岳撰『阿弥陀経新疏』なる一書の序文が収録されているのが確認できるが、『仁岳新記』と『新疏』が同一書であるのか、はたまた『仁岳新記』・『新疏』と『長西録』所伝の『疏』の三本は別書であるのかは、現状決し難い。『楽邦文類』の記述はひとまず置いておくことが許された場合という限定条件のもと、加えてあくまで推論の域を出るものではないが、次のような見解を立てることもできるのではないだろうか。すなわち、『法事讃疑芥』を含む〈浄土疑芥〉は、長西の講義を筆録したものとされ、写誤も散見される。なかには「智円疏」を「智恵疏」と書き損じるなど、聞き間違えたかのような誤りも見られることから、『仁岳新記』についても、「新記」は「指帰」を聞き間違えた結果と考えられなくもない。実際、長西録に同書名が見られないことが、それを裏付けていると見ることも可能であろう。もし『仁岳新記』が別に存在するのであれば、従来知られていなかった書となるほか、何故『長西録』に収録されなかったのかが問題となる。吉田淳雄氏によれば、『長西録』の成立は、長西が四五歳から六〇歳まで、さらに言えば一二三三年前後とし、「長西の修学成果の集大成と位置づけることができるのではないか」（「『長西録』の成立年時について」、『中国浄土教とその展開　金子寛哉先生頌寿記念論文集』二九五頁、二〇一一年）と推定しているが、集大成であるならば、自身が引用した典籍は網羅されているはずである。なお、小山正文氏によって紹介された現存最古とされる『長西録』（「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」、『同朋大学論叢』六二号、一九九〇年、以下『小山本』と略称）には、「指帰」ではなく、「指論」（小山氏前掲稿二一七頁）とあり、問題はより複雑化している。何にしても、『仁岳疏』は種々の問題を孕んだ書といえよう。次に、希深『阿弥陀経義解』（以下、『希深疏』と略称）である。『長西録』には撰者名を「希除」とし、註に「除」が「染」となるものや「希」の字がない異本を紹介しているが、『法事讃疑芥』では「希深」と記される。管見の限り、鸞宿撰『阿弥陀経諸解総目』（『続浄全』巻四・一八六頁下）のみ「希除」で伝えている。一方、『法事讃疑芥』からの孫引きの可能性は考慮すべき（前掲拙稿「概要」を参照）であるが、『法事讃私記』（『浄全』巻四・七四頁下）をはじめ、鎮西義諸師の『法事讃私記』註釈書などでは「希深」と表記していることに加え、『小山本』にも「希深」（小山氏前掲稿二一七頁）とあることから、今日手軽に披閲できる『長西録』の表記の誤りと考えられることを指摘できる（『真宗全書』巻七四所収本も同様）。
*4割註の「崔那抜多羅」については、「崔」は「求」の写誤と考えられ、「求那跋陀羅」のことであると推察する。
*5拙稿「永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について―附『阿弥陀経要記』逸文補遺―」（『真宗研究』六二号、二〇一八年）。なお、当該論攷発表時に、『法事讃疑芥』巻四・九丁左―一三丁右（原本には乱丁があり、九丁の続き

は一三丁となる）ならびに同九丁左の二箇所の逸文を見落としていた。どちらも他書で知られる逸文と重複（拙稿での59・61に該当）するものであるが、ここに報告する。

*6 神奈川県立金沢文庫蔵書写本（【請求番号】九三―三―一～二）。なお、撰者である入阿について、塚本善隆博士は鎮西義の敬蓮社入阿（一二〇三―一二八五）と考えられていたが（「金沢文庫所蔵 浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」、『浄土学』（復刻版）二輯、一九八〇年［初出は一九三三年］）、坪井俊映博士によって内容面より諸行本願義に属する入阿空寂のことであるとの説が提示され（「金沢文庫蔵 観経疏顕意抄著者入阿について」、『金沢文庫研究』六四号、一九五八年）、今日異説は出されていない。

*7 神奈川県立金沢文庫蔵書写本断簡（【請求番号】七五―六―一［甲］・二［乙］）。

*8 「慈恩大師の阿弥陀経註疏について」（『大正大学大学院研究論集』二号、一九七八年）

*9 『大須観音―いま開かれる、奇跡の文庫』（二〇一二年）一三四頁所収のコラム、落合俊典博士「真福寺の浄土教文献」を参照。なお、真福寺『漢書食貨志』の紙背文書については、山田孝雄氏の『漢書食貨志』（一九二八年）によってその存在が知られるようになったが、撰号は「聡肇」と判読されていたのを、落合博士が確認の上で修正された。

*10 「基撰とされる『阿弥陀経疏』の諸本について」（『印度学仏教学研究』六五―一、二〇一六年）。なお、曹氏は、真福寺本については名古屋市博物館より落合博士に提供された写真一〇枚を用いて研究したことを述べた後、未提供の部分があることを明かしている（五〇六頁、註(1)参照）。

*11 以下の引文については、便宜上、原文に付された訓点や傍註は削除し、私的に句読点を付した。

*12 表紙については、前掲の拙稿にて四巻分報告済であるが、その後原本を調査する機会を頂戴した。その際に、当初「湛睿」としていた巻二表紙右下の袖書が、「湛睿之」であることが判明したので、ここに報告して訂正する。